

「こころ会」(東灘)、野原小(栗)に

博報賞

子どもたちの教育に貢献した学校や団体、個人を顕彰する「第39回博報賞」(博報児童教育振興会主催)の国語・日本語教育部門に神戸市東灘区の「こころ会子どもこころ会」、国際文化理解教育部門に兵庫県立野原小が選ばれた。外国人児童の日本語教育を支援している「こころ会」は地域ぐるみのサポートが、野原小は、豪州の小学校との27年にわたる交流が評価された。贈呈式は11月14日、東京都千代田区の日本工業倶楽部で行われる。



外国人の子どもに日本語を教える「こころ会」のスタッフ(神戸市東灘区で)

こころ会 外国人児童に日本語

こころ会は、神戸市東灘区内の食品工場などで働く外国人の増加に伴い、その子どもたちの日本語教育や学習を支援しようと2002年に設立された。

当初は、ブラジルやペルーなどから来た子どもの多くが、言葉の壁や学力不足、いじめなどに悩んでいたと

いい、保護者らから相談を受けた運営委員長の長嶋昭親さん(66)らは「子どもたちの学習だけでなく生活環

野原小 豪の小学校と交流27年

1981年から豪・ブリスベーン市のアイアンサイド小との交流事業に取り組んできた野原小の新庄康史

境もサポートしよう」と考えたという。

現在は、大学生や主婦ら約20人が週4日、9か国の小中学生約20人に算数などの教科を個別指導。子どもたちの心のケアも行っている。地域の祭りなどを通じて地域との交流も深めており、長嶋さんは「受賞は励みになる。子どもたちが自分たちの文化を守りながら自立する手助けを続けた」と期待を込めた。

校長は「地域ぐるみの取り組みが認められ、うれしい」と喜びを表した。両小は、隔年で互いの児



ブリスベーンの小学校で現地の子どもたちと交流する野原小の児童(右)＝今年7月、アイアンサイド小で

童を受け入れており、保護者や地域で作るNJA(野原日豪親善交流会)が支援。ブリスベーンから66人の児童や保護者が来校した昨年は、4泊5日のホームステイで歓迎した。今年7月に野原小の5、6年の児童14人を含む25人が海を渡り、現地で交流を深めた。

野原小の全校児童は36人で、全学年で英語の学習時間を設けている。児童の多くが言語や文化、人種の違いを受け止め、外国の人々とのふれあいに喜びを感じられるようになってきているといい、新庄校長は「さらに息の長い活動にしたい」と話している。